

# The Englishwoman's domestic magazine

(デイ・イングリッシュウーマンズ・ドメスティック・マガジン)

London : S.O. Beeton , 1852—1879

Hiler p. 282

イギリスに初めて登場した女性誌は「ザ・レディス・マーキュリー (The ladies' mercury)」と呼ばれ、1693年に月刊誌として発刊された。「未婚の女性、既婚の女性、未亡人であろうとなかろうと、女性の愛、結婚、作法、ドレスと気質にかかわるあらゆる興味深い質問への回答を提供する」ことを目的として編集された。

1806年には、最初のファッション雑誌「ザ・レディス・マガジン (The lady's magazine)」(1770年発刊)に続いて、「ラ・ベル・アッサンブレ (La Belle assemblée)」が発刊された。その編集方針は極めて道徳的なものであったが、ファッションの情報にも重点をおいた。挿み込まれた手彩色の最新のファッション画や着こなしなどの記事に人気が集まり、その後の女性誌に引き継がれていった。

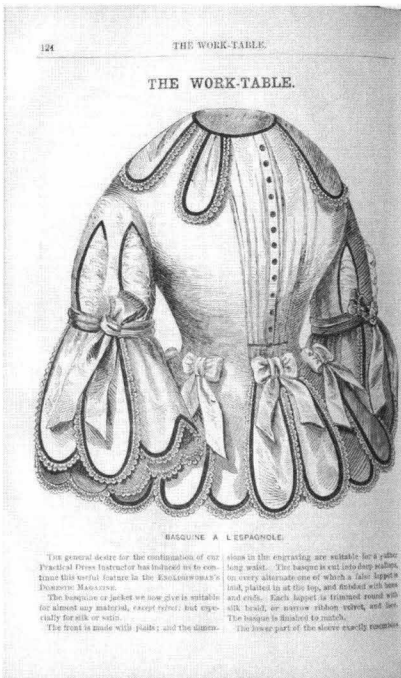
19世紀初頭当時の女性で、文字を読むことができたのは、「淑女の教育」を受けた上流階級あるいは上層中流階級の子女に限られていた。やがて、印刷技術の向上、輸送手段の発展、出版に関する諸税の軽減・撤廃という社会背景とともに、19世紀半ばには、女性雑誌も大衆化されていった。

ロンドン、Milk Streetの宿屋の息子として生まれたサミュエル・ビートン (Samuel Orchart Beeton 1831—1877) によって、1852年に、「英国婦人の家庭雑誌 (The Englishwoman's domestic magazine)」

が発刊された。当時、2ペンスという低価格で発売され、広範にわたる「中流階級の女性層」市場を開拓したのである。

サミュエル・ビートン夫人、イザベラ (Isabella Mary Beeton 1836—1865) は、夫の出版事業に加わり、1年間「英国婦人の家庭雑誌」に家庭向きの記事も書いていた。1860年にはパリを訪れ、フランスの関連事業を設立した。また、彼女はパリの記事を書いたり、広告も扱い、洋裁の型紙の扱い方がわからない読者へその作図方法の説明さえしていた。イザベラの熱意、系統的手腕は出版社の経営にとって決定的なものであった。

本誌の新シリーズでは、毎月高品質な彩色で最新のパリ・スタイルのファッション画や読者の要望に応じて型紙をつけ、当時の女性誌の重要な先駆けとなった。そのような女性誌はイギリス本国のみならず、インドをはじめとする大英帝国傘下(植民地)の各地でも読まれ、大英帝国女性文化の統合にも一役買っていた、ということである。



1857年 スペイン風婦人用胴衣

1870年代前半には、付録の型紙が通信販売で入手できるようになった。1880年代になると、最新流行の衣装のファッション画や型紙が安く全国的に普及したため、モードの標準化という点で、本誌をはじめとする当時の女性誌は決定的な役割を担った。  
(佐藤俊子)



1870年

左 灰色ポプリン地の旅行着 (バスル初期)

中 8-10歳くらいの少女服

右 栗色カシミア織りの旅行着 (バスル初期)